令和４年度　千葉氏公開市民講座　講演録

鎌倉幕府成立史における
千葉氏と北条氏

令和４年６月25日

千葉市

目　次

開催あいさつ（天野　良介）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

講演

鎌倉幕府成立史における千葉氏と北条氏（岩田　慎平）・・・・４

質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６

【おことわり】

本講演録は、令和 4 年 6 月 25 日（土）に千葉県文化会館で開催された千葉氏公開市民講座「鎌倉幕府成立史における千葉氏と北条氏」の講演内容をまとめたものです。

講演者等の役職は、講演当時のものです。

司会：皆さま、こんにちは。ただ今より、令和４年度千葉氏公開市民講座「鎌倉幕府成立史における千葉氏と北条氏」を開講いたします。私は、今回の講座の司会進行を務めさせていただきます、郷土博物館の菅と申します。よろしくお願いします。では、はじめに当館の天野館長より、ごあいさつを申しあげます。

開会あいさつ

千葉市立郷土博物館館長　天野良介

天野：皆さま、こんにちは。郷土博物館の天野でございます。本日は、このように多くの皆さま方においでいただきまして、誠にありがとうございます。新型コロナウイルス感染症の今後の成りゆきは、まだ予断を許さないところではございましょうが、昨今の沈静化に伴い、公共機関でも徐々に参加者数の制限などの条件が緩和をされていく状況でございます。しかし、本講座におきましては、制限が緩和されていない時期に募集をした関係もあり、人数を相当数制限するかたちで実施をさせていただくことになりました。そのため、お申し込みをいただいた全員がこの場に足を運んでいただくことができなかったことは、誠に申し訳なく思っております。しかし、昨年同様に、今回の岩田先生のご講演につきましては、文字起こしのうえ、追って『千葉氏ポータルサイト』にアップさせていただきますので、そちらで誰でもお読みいただけるようにさせていただきます。ご承知おきいただければ幸いです。また、今後、鎮静化状況が維持されるのであれば、本館といたしましても、条件を更に緩和していくつもりでございますので、そちらにつきましても、ご了承いただければと存じております。

さて、本市は昨年「市制施行 100 周年」という記念すべき年を迎えました。当館では、過去２年間に３回の特別展・企画展を開催させていただき、この 100 年間について振り返ってまいったわけでございますが、いよいよ４年後、令和８年には「千葉開府 900 年」というアニヴァーサリー・イヤーを迎えることになります。千葉常胤の父、常重が内陸部の大椎から、この臨海部である千葉市の中心部に本拠を移してから、そしてこのまちの礎を築き始めてから 900 年という年となるわけです。それに向け、本館でも、さまざまな企画を実施しながら、皆さま方に千葉一族の歩んだ歴史を、深く、広くご理解いただけるようにしてまいりたいと思っております。折しも本年は、大河ドラマ『鎌倉殿の 13 人』の放映が追い風になり、また、岡本信人さんが演じる千葉常胤も、この半年間に何度も登場してまいりまして、千葉市民の皆さま方も、この時代や千葉一族に関する関心も非常に高まっているときでございます。これは絶好の好機ではないかな、とも考えておるところでございます。

ただ、本市における千葉氏の理解は、これまではややもすると、顕彰的、あるいは郷土史という、非常に狭い範囲で行われ勝ちであったと、われわれは認識しております。翻っ

て、歴史全体のなかで、千葉氏が如何なる位置づけになっているのかという視点が、若干おろそかになっているのではないかと、私なども考えておりました。また、頼朝との関係性が強くクローズアップされる反面、それ以降の一族の歴史に関する認識が、どうしてもかすんでしまうという、そんな実態も感じております。そのことが、千葉一族、千葉氏に対する豊かな認識を、どうしても皆さま方に広く周知できなくなっている大きな原因ではないかなと、われわれも自省するところでございます。

こうしたなかで、今回、近著として、中公新書の『北条義時　鎌倉殿を補佐した二代目執権』という、私も拝読をさせていただきましたけれども、大変優れた、刺激に満ちた素晴らしい書籍を上梓されました、気鋭の日本の中世史研究者のお一人であり、鎌倉武士のゆかりの地でもある、神奈川県愛甲郡愛川町郷土資料館にて主任学芸員をお務めでいらっしゃいます、岩田慎平先生をお招きして、「鎌倉幕府成立史における千葉氏と北条氏」と題するご講演を賜りますことは、誠に時宜にかなったものではないかと存じあげます。なぜならば、頼朝挙兵前後の動向は言うに及ばず、頼朝没後に多くの御家人が粛清されていくなかで、一部はもちろん粛清の対象になった一族もおりますけれども、千葉一族はなぜ鎌倉時代を生き抜いていくことができたのか。その理由を理解するためには、北条氏との関係性についての分析が、何にも増して不可欠だということは言うまでもございません。中世武士論、鎌倉幕府論、とりわけ北条氏のご研究をご専門とされております岩田先生におかれましては、この趣旨をご理解いただき、遠路千葉までご足労していただくことをご快諾いただけましたことを、あらためまして私どもは心から感謝を申しあげたく存じております。この会に遅れてはいけないということで、昨日は市内に前泊までされて、準備に当たられたということを先ほどお聞きして、本当に我々といたしましても頭が下がる思いでございます。

本日は、こうした近年の研究動向を踏まえ、北条氏からの視点で千葉氏にアプローチをしていただき、鎌倉幕府の政治動向という広い視野から、千葉氏と北条氏との関係性をひもといていただくことで、従来とは異なる千葉氏像をお示しくださるものと、期待が高まるところでございます。

このあと司会から、詳細なる先生のご紹介もございます。そして最後には、書面を通じてになりますが、質疑応答の時間もご用意してございます。このあと休憩を挟んでおよそ２時間、ご参会くださった皆さまにとって、この講演が有意義なるものになりますように祈念を申しあげる次第でございます。言葉は整いませんが、ごあいさつとさせていただきます。本日は、何とぞよろしくお願いいたします。

司会：それではあらためまして、本日の講師をお願いしてございます、岩田慎平先生をご紹介いたします。

先生は、昭和 53 年（1978 年）、和歌山県のお生まれで、京都教育大学教育学部を卒業後、佛教大学大学院修士課程を経て、関西学院大学大学院で歴史学の博士号を取得されました。

関西学院大学、立命館大学等で非常勤講師を務め、現在は神奈川県愛甲郡の愛川町郷土資料館主任学芸員として勤務されています。日本中世史、特に平安後期から鎌倉時代を専門に研究され、中世武士や鎌倉幕府論に関する論文を多数発表されています。著作には、『乱世に挑戦した男　平清盛』新人物往来社 2011 年刊、『北条義時　鎌倉殿を補佐した二代目執権』中公新書 2021 年刊がございます。特に『北条義時』は北条政子の弟で、鎌倉幕府を主導し、承久の乱で後鳥羽上皇に勝利し、幕府を確固たる存在にした北条義時の生涯を新たな視点で描いた話題の本です。皆さまのなかにもお読みになった方が少なくないと存じます。

本日は、北条氏をはじめ、鎌倉幕府に詳しい中世史研究者として注目を集めていらっしゃる先生から、広い視点に基づいて、中世武士や千葉氏について、興味深いお話が伺えるものと存じます。ご期待ください。それでは先生、どうぞよろしくお願いします。

「鎌倉幕府成立史における千葉氏と北条氏」

神奈川県愛甲郡愛川町郷土資料館主任学芸員　岩田　慎平　氏

はじめに　武士社会と貴族社会

岩田：あらためまして、ただ今ご紹介にあずかりました、岩田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）ありがとうございます。すっかり夏の到来を思わせるような暑さのなか、このようにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。この会場のある亥鼻公園ですか、今日来てみましたら、アジサイがとてもきれいで、私はすごく印象的でした。アジサイの花は、小さい花がいくつも集まって一つの花ができるということは、皆さんもよくご存じだと思います。このあと、この会が終わるころには少し日も落ちて涼しくなるでしょうから、公園内を散策されるのもいいかもしれません。そういったことを楽しみにされている方も多いんじゃないかと思います。

今日はアジサイが、小さい花がいくつも集まって一つの花になっているように、いくつもの武士が集まり合ってできた鎌倉幕府といったものについてお話をしたいと思います。

本題に入ります前に、少し私自身のお話をしたいと思います。今ご紹介いただきましたように、京都教育大学、佛教大学、それから関西学院大学というところで学んで来たのですけども、もう一つ私が勉強していくうえで落とすことができないのが、千葉市出身で、中世武士研究のまさに第一人者でいらっしゃいます野口実先生。皆さんの中にも何度もお話を聞かれたという方は多いと思うのですが、実は京都女子大学教授の野口実先生が主宰される研究会で、私は 10 年ほど勉強させていただきました。その時間がなければ、私は今こうして皆さんの前に立つようなこともなかっただろうなと思うわけで、その野口先生の

業績に学びながら、今まで過ごしてきた身としては、先生にゆかりのある千葉市で、こういったお話をさせていただけるのは本当に夢にも思いませんでした。

資料をご覧いただきたいと思いますが、本日は、千葉氏、北条氏、その他の御家人に注目しながら、保元の乱、平治の乱から、鎌倉幕府の成立、それから承久の乱ごろまでの動向をたどっていきたいと思います。そういったなかで、例えば千葉氏は、大河ドラマのタイトルになっております 13 人の合議制になぜ入らなかったのか、あるいは、なぜ千葉氏は滅ぼされなかったのかといったことにも、適宜言及しながらお話をしていきたいと思います。

まず「はじめに」というところです。私の興味関心は、貴族社会全体のなかで、武士や鎌倉幕府がどのように機能していたのか、ということにあります。貴族社会などと聞くと、「え？」という顔をされる方がいるかもしれませんが、嫌がらずにどうぞ聞いていただきたいと思います。その話をしないと、今日の話はたぶんご理解いただけないと思いますので、最初に武士の社会と貴族社会の話をしていきたいと思うのです。ともすると、武士と貴族というのは対立するものとして捉えられてきました。例えば鎌倉幕府というのは、武士が貴族の支配を打倒して、ついに自分たちの政権をつくりました、といったような理解がございます。現在でもそういう見方がされることもあるかもしれませんが、はっきり言いますと、それは誤りでございます。今日、ここを出るときには、違う見方で帰っていただきたいと思います。

そこに書いておりますように、日本中世の社会におきましては、貴族社会という大きい枠組みがあります。そのなかに、より小さい武士の社会というものが含まれているというわけでございます。貴族社会という大きな枠組みのなかに、武士たちの社会があるということです。どういうことかと言いますと、武士というのは、これはあくまで職業であります。いろんな職業があります。例えば中世においては、農業に従事している人もいるでしょう。林業や漁業に従事している人もいるでしょう。あるいは、例えば陰陽師みたいな職業もあります。そういったなかで、武芸を専門とする人たちがいます。それが武士です。

それとは別にもう一点。当時の貴族社会を考えていただくうえで、欠かすことができないのは、「位」が存在しているということ。つまり、階級社会だということです。貴族社会の階級というのは、上は一位から始まります。つまり正一位から始まって、その下に従一位がある。そして正二位があって、従二位があって、正三位があって従三位があって、ずっと続いていって、下のほうの五位、六位、七位、八位云々と続いていくという、そういう階級があるということですね、資料にも簡単に書いてございますが、一位から三位までの人たちは、これはいわゆる「公卿」と呼ばれる人たちですね。現在と中世社会とを簡単に比較するのはあまりよくないことかもしれませんが、例えていうならば、この一位から三位ぐらいまでの公卿身分の人たちは、現在でいうところの内閣の閣僚とか、そういった人々のことです。国政の運営に直接当たる人々です。そしてその下に、四位や五位くらいの人たちがいるわけですが、この人たちのことを、一般的に「大夫」、あるいは「諸大

夫」と言ったりします。そして、われわれが一般的に貴族と言う場合、その貴族というのは、この五位以上の人たちです。位で言うところの五位以上を持っている人たちのことを「貴族」と言うわけでありますね。

そこに届かない、すなわち六位の人たち、あるいは六位相当の官職しか持たない人たち。この人たちのことを「侍」と言うわけです。侍と言いますと、お侍さんなんていうことで、腰に刀を差した武士ですか、お武家さんですか、なんていうように思われるかもしれませんが、それはあくまでも江戸時代以降のイメージでありまして、侍というのは、もとはと言えば、これは身分、階級を示す言葉です。

武士も含まれるところの貴族社会というのは、まずは上下の身分があるということです。位階というものがあります。上から順番に。そしてそのなかで、さらに細かい職業の分類があります。ということは、位の高い職業武士という者は当然いるかもしれないわけですね。位と職業は別ですから。という話を次にしたいと思います。

これからお話しする幕府の御家人、北条氏ですとか千葉氏ですとかの話が出てくるんですが、幕府の御家人の大多数は、六位相当の侍身分です。もう一回言います。幕府の御家人の大多数は、六位相当の侍身分です。ということは、先ほど五位以上が貴族と私は申しましたので、幕府の御家人の大多数は貴族ではないということです。ただですね、このあとしばしば登場します北条義時などは、従四位下まで昇進いたします。つまり、彼は職業が武士で、身分は貴族です。北条義時は貴族なんです。「え？」って言われるかもしれませんが、事実です。

つまり、幕府御家人で、大多数は先ほど申しました侍身分ですけども、そのなかのごく一部に諸大夫クラス、つまり貴族身分を持った幕府の御家人たちもいるわけです。そして、幕府のなかで、おそらく１人だけ、公卿身分まで到達する人がいます。それが鎌倉殿です。鎌倉殿は、だいたい三位以上。このあと大河ドラマでは頼朝はもうすぐ亡くなってしまうから呼ばれないかもしれませんが、頼朝のことは「二位殿」とか、「二品」と呼ばれます。特に二位殿というように言われたりするのですけども、頼朝は正二位の位をもらいますので、公卿身分です。そしてもちろん頼朝は職業が武士ですから、つまり武士であるところの公卿ということになるわけです。

というわけで、少ししつこいですけども、位階と職業は別だということであります。つまり、身分は貴族ですけれど職業は武士ですという人は、当然いるというわけであります。少し例を出しておりますけども、例えば、平清盛という人物。10 年前に大河ドラマの主人公になりましたけれども、この人物も従一位まで昇進しています。当然、武士であるところの公卿であります。またそのほかですね、このあと少しお話のなかで出てくると思うのですけども、源頼政、源三位（げんざんみ）頼政という人物がおるんですけど、この人も従三位まで行っておりますので、この人も当然武士であるところの公卿です。今申しました源頼朝も、正二位に昇進していますので、公卿身分の武士ですね。そのほか有名なところですと、源義経はですね、実は従五位下、伊予守に就任しておりますので、この時点で貴族身分を獲得

しております。源義経も貴族なんですね。それで、北条義時も従四位下まで到達していますので、もちろん貴族身分であります。

ここまで、つらつらとお話してまいりましたけども、以下今日お話をいたします千葉氏です。千葉氏も、八条院領下総国千葉庄の庄官を務めるという、この属性を述べればおわかりのように、また、それと対比させてお話しする北条氏も、伊豆国の国衙在庁という国衙の役人ですね、そういった属性を語るまでもなく、彼らをはじめとする全国の武士というのも、すべからく貴族社会に組み込まれていた人々だということです。この辺りも、まずはご承知おきいただきたいと思います。もう一回言います。全国の武士というのは、貴族社会に組み込まれた存在だということです。ということは、武士の存在形態というのは、貴族社会の動向に影響されるということです。今日お話をお聞きいただくうえでは、大変重要ですので、ぜひ覚えておいていただきたいと思います。

1　幕府成立前史としての保元・平治の乱と千葉氏・北条氏

前置きが長くなりましたが、最初の話に行きたいと思います。「幕府成立前史としての保元・平治の乱と千葉氏・北条氏」というところでございます。鎌倉幕府の成立から話し始めてもよいのですが、幕府の成立等々をお話しするうえでは、やはり前提となる保元・平治の乱、つまり幕府成立以前に、千葉氏や北条氏がどういうことをしていたのかということに、少し触れておく必要があるだろうということでございます。

保元の乱についてまずはお話ししておきたいと思いますが、資料に簡単な説明を載せております。鳥羽院（鳥羽上皇）が亡くなったことがきっかけで起きた、京都での争乱ということになります。この保元の乱が特徴的であったのは、双方の勢力が、それぞれ配下の武士たちを大量動員し、そのことによって、京都で激しい市街戦が展開されたという点にあります。そして、今日のテーマに即して言いますと、千葉常胤がこの保元の乱に参加しております。それに対して、今日、千葉氏との比較でお話しさせていただきます北条氏に関しましては、この保元の乱に参加したという徴証がないということでございます。

まずは簡単に見ておきたいと思います。千葉氏のほうです。『保元物語』の上巻にはこのような記述があります。「安房国には安西、神余（かなまり）、沼の平太、丸の太郎、上総国には介八郎広常、下総国には千葉介常胤」ということで、次のページをめくっていただきまして、源義朝が率いた武士たちがずっと国別に書かれているわけですが、安房国や上総国、それから下総国の記述のところに、介八郎広常、上総広常ですね。それと、千葉介常胤、千葉常胤の名前があるということであります。このようにですね、千葉常胤というのは、保元の乱以前には源義朝に従属しております。源義朝というのは、そのほか東日本を中心とする全国から武士を動員しております。近江、美濃、尾張、三河、遠江、駿河、相模、安房、上総、下総、武蔵、上野、下野、常陸、甲斐、信濃の武士が参戦しておるわけであります。これはすべて義朝に従う武士たちということで紹介されるわけですが、このなかには国衙から動員された武士たちもいたかもしれませんので、このすべてが義朝と主従関係を結ん

でいたかどうかというのはちょっとわからないのですが、ただ、先ほど紹介しました上総広常、それから千葉常胤に関しては、源義朝と主従関係を結び、その関係から参戦しただろうということが指摘されております。

つまり、千葉氏に関しては、鎌倉幕府ができる以前から、頼朝の父親である義朝にすでに従っていたというわけですね。頼朝のお父さんとはすでに縁があったということです。これはやはり重要でありましょう。しかしですね、まさに頼朝の挙兵、これは治承４年、1180 年ですが、頼朝の挙兵を最も身近に支える北条氏に関しては、実は保元の乱に参戦したという所見がありません。というよりも、北条氏をはじめとする伊豆国の武士は、保元の乱に参加したという記録が残ってございません。伊豆国というのは、保元の乱以前の仁平元年（1151）年７月から保元の乱のあとの保元３年（1158）11 月まで吉田経房という人物が国の守を務めております。経房についてはこのあと説明いたします。もちろん吉田経房は、この間にどうも地元の武士である北条時政と付き合いがあったらしいということがわかっておるわけですが、にもかかわらず、動員されたという徴証がないというわけでございます。

さて、ではその北条時政が、伊豆守である藤原（吉田）経房とどういう関係があったのかということですね。その記録をご紹介したいと思うのですが、時間がないと思いますので概要だけご紹介したいと思います。『吉口伝』ですが、興味がある方はお持ち帰りいただいて、また後ほど読んでいただければと思います。何が書いてあるかといいますと、藤原（吉田）経房が、伊豆国を知行しているとき、おそらくこれは伊豆守だったときと言ってもいいと思います。吉田経房が伊豆守だったときに、伊豆国の在庁官人であった、つまり、国衙の役人であった北条時政が国司によって拘束されるという事件があったわけです。吉田経房とは違う国司に身柄を拘束されるという、理不尽な出来事があったんですけれども、そのときに経房が何か時政に対して恩を施してですね、時政がその窮地を脱することができたらしいということが書かれておるわけであります。その際に、つまり身柄を拘束されたときに助けてくれた吉田経房というのが、大変優れた人物だということで、北条時政は感心したと源頼朝に語った。吉田経房がのちに関東申次、つまり幕府と朝廷とを結ぶ役割を与えられたんだという、そういう話になっておるわけです。ここで名前が登場しますのが北条時政と、それから源頼朝と、吉田経房と３名であります。

順に見ていきたいと思うんですけども、この『吉口伝』からすると吉田経房と伊豆国の在庁官人であった北条時政は、頼朝が挙兵する以前からすでに知り合いだったらしいということがわかるわけですね。

皆さんがご存じのとおり、時政と頼朝はこのあと知り合いになります。なぜか。娘の政子が頼朝の奥さんになるからです。さらにですね、もう一つ。吉田経房と頼朝の関係はどうかということを見ておきたいと思います。『吉口伝』によれば、時政が頼朝に経房を紹介したというような話になっているんですけども、なかなかどうして、吉田経房と頼朝もですね、頼朝が挙兵する以前から、ちゃんとお知り合いです。一緒に仕事をしております。

といいますのは、『吉口伝』の記事の左側に経房と頼朝の経歴を書いておきましたが、仁平元年、1151 年に経房が伊豆守になっております。だから、このころ、あるいはこれ以降に、『吉口伝』によれば、経房と時政が知り合いになったわけです。その後ですね、吉田経房は皇后宮権大進に昇進するんですけれども、このとき皇后宮権少進が源頼朝です。つまり、吉田経房の直属の部下が、ほかならぬ源頼朝だったのです。統子内親王の、これは後白河院の姉に当たる人物ですけれども、その人物の皇后宮権大進と、それから権少進を務めていたときです。この両者は、統子内親王が上西門院という女院になったあとも、引き続いて経房のほうは上西門院の判官代、それから頼朝のほうは上西門院蔵人ということで、そのまま統子内親王、上西門院にお仕えすることになるわけであります。そのことが示されている史料として、その左側に【参考】としまして『山槐記』保元 4 年 2 月 19 日の条を紹介しております。これも読んでいくとちょっと長くなってしまいますので、簡単にかいつまんでお話ししたいと思います。

これはですね、統子内親王、後白河院の姉に当たる人物ですが、この人物が上西門院という女院となるときに、女院の身の回りのお世話ですとか、所領を管理する家人たちを管理する家政機関が置かれます。この 2 月 19 日は、まさにその家政機関開設の儀式の日でありますので、当然家政機関の職員は全員集められますし、それからさまざまなゲストが呼ばれたりするわけです。源頼朝と吉田経房という人物が２人おりまして、それぞれ職員として参列しているということがご覧いただけるのではないかと思います。この儀式に際して、参列者たちに何度かお酒が振る舞われるわけなんですけれども、その１回目、最初のお酌の際に、ゲストたちにお酌をして回ったのが、若かりし頃の源頼朝であります。それから２回目ですね。これを務めたのが、頼朝の直接の上司に当たります吉田経房であります。つまり彼らはですね、保元の乱のあとからすでにですね、京都の貴族社会において、部下と上司として一緒に仕事をしていた仲だ、ということがおわかりいただけるかと思います。

つまりですね、ともすれば晩年の源頼朝が、貴族社会に憧れるようになっていって、東国の武士を離れて貴族社会のほうへふらふらっとすり寄っていってしまった、そういった説明をされることがあるのですけども、そんなことはないんですよ。若いころからあの人は貴族社会のなかにどっぷり浸かっていたんです。しかもこれは、12 歳とか、13 歳とかそんな時です。12 歳とか、13 歳で、こういうかたちで貴族社会に出入りができるのは、将来、公卿身分に到達できるような人たちに限られます。頼朝というのはそういう人なんですよね。そういう人が、たまたま伊豆国で挙兵してできたのが鎌倉幕府だという、今日はそういう話をしていきたいと思うんですけれども、この話をしていくと長くなるので、簡単に終わりにします。

もう一点、この『山槐記』の記事で注目しておいていただきたいのが、別当として呼ばれている人物に、「清盛朝臣」という人物が出てきているのをご覧いただけるでしょうか。傍線を引いてございます。これはご存じの方が多いと思います、ほかならぬ平清盛であり

ます。つまりですね、この上西門院の殿上始の儀式におきまして、平清盛は、10 代前半の頼朝から酌を受ける側の立場だったわけです。だから、このとき頼朝と清盛は顔を合わせているわけです。この二十数年後ですね。清盛が熱病に侵されて亡くなる。「自分の墓の前には頼朝の首を供えろ」、なんていう物騒なことを言うわけですけども、この時はそういうことはお互い知る由もないというように思われます。

話がいろいろ飛んで申し訳ございませんが、とにかくいずれにせよ、この『吉口伝』と、それから『山槐記』をご覧いただいたらわかりますように、鎌倉幕府草創期に互いに関わり合った３人の人物、源頼朝、それから吉田経房、そして北条時政、実は彼らは鎌倉幕府ができる以前、鎌倉幕府なんて影もかたちない時代から、実は京都の貴族社会のなかで、お互いに知り合いになっていたのだという。そういった話でございました。

さて、保元の乱のあとに平治の乱というのが起こります。平治の乱のあと、源頼朝は伊豆国へ配流されてしまいます。そしてそこで 20 年ばかりを過ごすことになるわけです。それで、最初のところでいきなりまとめに入ってしまいますが、頼朝挙兵以前の千葉氏と北条氏のことを、簡単にまとめておきたいと思います。

千葉氏は、先ほどご覧いただきましたように、保元の乱、それと省略いたしましたが平治の乱にも、いずれも源頼朝の家人として参加しております。もともと中世の武士というのは、すべからく自らの所領ですとか、自らの利害関係に直接関わり合いを持たない戦いというのは、基本的に参加したくないわけです。戦争というのは、ものすごく大きな消費活動ですので、あまり大量消費したくないわけですよね。あまり関係のない戦いには参加したくないのですけども、それにもかかわらず、京都のど真ん中で発生した戦いに参加したというのは、やはりこれは関東全域に家人を支配した源義朝ならではということが言えるではないかと思います。その義朝に従ったからこそ、千葉常胤は保元の乱、平治の乱といった戦いに参加することになったのだろうということであります。

また千葉氏、千葉常胤にとってはですね、こういった保元の乱、平治の乱への動員というのも、すなわち京都における活動、在京活動の一つというように評価することも可能ではないでしょうか。また、関東全域から広く家人を組織したのは源義朝ならではですという言い方をいたしましたが、それに対して、例えばよく源義朝と対比して語られる、先ほども名前が挙がりました平清盛は、実はこの時代の最大の武士団を率いていたわけですけれども、平清盛が動員したのは、基本的に畿内周辺、つまり京都の周辺から動員したという特徴がございます。清盛と義朝との武士団の編成のあり方の違い、そういったところは千葉常胤が保元の乱、平治の乱に参加したという事実に表れているということがいえるのではないでしょうか。

また、北条氏なのですが、保元・平治の乱に参加した証拠は見られません。先ほども申し上げましたとおり、伊豆国は後白河院とも近しい吉田経房の支配下にあった国にもかかわらず、またあるいは源頼政、源三位頼政が知行国主になったにもかかわらず、これらの戦いには参加していないということであります。ですので、考えられる理由ですけれども、

これは伊豆国の武士については、源義朝に編成されていなかったのではないかということも推測することができるわけであります。

さて、ご存じかもしれませんが、平治の乱によって源義朝は滅びます。殺害されるわけですけれども、それをもって義朝に編成された武士たちも散り散りばらばらになってしまいます。そして、平家と、それから平家に仕える武士たちの勢力が強い時代が来るわけであります。そういったなかでは、皆さんもよくご存じだと思うんですけれど、平家の時代には、例えば千葉氏においては、下総藤原氏ですとか、あるいは頼清流の源義宗といった武士たちが介入してきまして、いわば存亡の危機に立たされていくことになります。

それがより決定的となりましたのが、頼朝が挙兵する前の年に起こりました、平家の軍事クーデター、「治承三年政変」というものであります。治承三年政変によって、平家が政権を握りまして、いわゆる平家政権（平氏政権）というものが成立するわけです。しかし、そういった時代が来ますと、千葉氏にとってもより苦しい時代がやってくる。そしてそれがやがて、頼朝に従っての挙兵というところにつながっていくということになるわけであります。

２　頼朝の挙兵と千葉氏・北条氏

さて、ようやく「頼朝の挙兵と千葉氏・北条氏」ということで、治承４年の話に入っていきたいと思います。

先ほども申しましたけども、平治の乱のあとの千葉氏というのは大変苦しい状況に置かれていました。そしてそれがピークに達したのは、治承三年政変ということで、平家が政権を握った時代ということですけれども、特に平家の家人であったわけではない千葉氏は、ここで抑圧されるわけです。そしてさらにこういった状況に拍車をかけたのが、「以仁王の挙兵」と呼ばれるものであります。治承４年４月に、平家政権に対抗する武力蜂起が発生するわけであります。この直前に平家が安徳天皇を即位させたわけですね。以仁王というのは後白河院の皇子ですが、平家の強大な軍事力を背景にした安徳天皇が即位したことによって、即位の希望が断たれた。では、武力を背景にした平家を、自分たちも武力で打倒しようではないかということで挙兵したのが、以仁王であります。この以仁王の挙兵は直ちに鎮圧されてしまうわけですけれども、ただそのあとにも争乱は全国に拡大していくことになります。

それで、こういったことをきっかけに、東国武士たちも次々と挙兵していく。そのなかに頼朝の挙兵というものも位置づけることができるのです。それで一点またご注意いただきたいのが、例えばですね、相模国においては三浦氏ですとか、この近辺の両総平氏、上総国や下総国ですとか、あるいは甲斐国の甲斐源氏といった人々がいるのですけれども、こういった東国武士は源氏に結集したんですか、なんていうふうによく言われます。つまり、平家の時代がありました。平家の時代は許せないから、じゃあ、自分たちは源氏に結集するんだ。つまり、平氏と源氏、対立的に捉えるんだ、なんていうふうに見られる場合

もあるんですけども、ことはそう単純ではないわけです。といいますのは、揚げ足を取るようですけども、例えば相模国の三浦氏ですとか、それから両総平氏、両総平氏は皆さんのほうが詳しいはずですけれども、彼らも平氏なんですよね。桓武平氏です。だから、ただ源氏か、平氏かと言うんだったら、彼らは平氏なわけです。つまりその平氏が同じ平家に、同じ平姓の平家に反乱するんですかということになるわけですので、これはそういったことでは説明がつかないわけでありますよね。もっと現実的な政治上の問題から、この挙兵に至ったわけであります。

また、一方で、波多野氏や山内首藤氏、これはいずれも相模国の武士であります。それから下野国、宇都宮氏というのがいるんですけれども、彼らは源氏、平氏とかということではありませんが、もともとの主である河内源氏源義朝によって、相模国や下野国といった地域に配置されていった武士たちなんです。つまり、彼らが現在そこに住んでいるのは、もとはと言えば河内源氏に縁があったからですよね。つまりご先祖様までたどっていけば、河内源氏に大変ご縁があるはずの人たちですけども、彼らは頼朝の挙兵当初は、敵対、あるいは傍観しています。つまりご先祖様が河内源氏にすごくお世話になっていたにもかかわらず、積極的に応じなかった武士たちもけっこういますよ、ということです。

これは当然のことなのですけれども、当時は平家の時代ですから、平氏の家人というのは体制側になります。これもこういう話もすると、よく「え？」っと言われるんですけれども、治承４年に伊豆国で挙兵した当初というのは、頼朝は「謀反人」なんですよね。反政府勢力です。ですので、当然不利なのです。それで、反政府勢力は、挙兵したら誰と戦わなきゃいけないかというと、当然体制側、政府軍と戦わないといけないわけです。政府軍は、この場合は平家となります。どんな人たちがいるのかということですけれども、「頼朝挙兵直後の平家方」とレジュメに書いておるんですが、例えば傍線を引いた人物ですね。河村義秀、渋谷重国、糟屋盛久云々というように傍線を引いた人物がいるんですけれども、当初は石橋山合戦で平家方として頼朝追討に当たった人たちです。つまり、頼朝軍を鎮圧するために戦った人たちのなかで、のちに幕府の御家人、すなわち頼朝に従った人たちということになります。逆に言うと、のちに幕府の御家人になる人たちのなかにも、当初はこれだけたくさん平家に従った人たちがいるというわけです。ですので、頼朝が広く坂東の武士たちの支持を集めて挙兵しましたというのは、結果的にそうなったんですけれども、当初においてはだいたいうそです。頼朝の政権は、ごく少数の反政府勢力を集めて勝ち上がった結果、というわけでございますね。

さて、残り時間が少ないんですけども、ようやく前半の締めのお話をしたいと思います。東国武士と「貴種」という話をしたいと思います。その前に皆さんにとってはすごく有名な史料だと思いますが、その記述をちょっと紹介いたします。『吾妻鏡』の治承４年９月17日の条です。これはなんで有名かと言いますと、まさに千葉常胤と頼朝が対面を果たした記事です。千葉常胤が息子たちを連れて頼朝に面会したという、大変感動的な場面です。しかし、私の紹介したいのはそこではなくて、その次の傍線を引いた箇所です。

千葉常胤は１人の若者を連れて来ております。誰を連れて来たかといいますと、傍線を引いた箇所でございます。ご覧いただきたいと思います

是、陸奥六郎義隆が男、毛利冠者頼隆と号す也。紺村濃の鎧直垂を着け、小具足を加へ、常胤之傍に跪く。其の氣色を見給ひ、尤も源氏の胤子と謂つ可し。仍て之を感じ、忽ち常胤の座上に請じ給ふ。父義隆は、去ぬる平治元年十二月天台山竜華越に於て、故左典厩の奉為に命を弃つ。時に頼隆産生の後、僅に五十余日也。しかるに件の縁坐に処せられ、永暦元年二月、常胤に仰せて下総国に配さると云々

これはどういう場面かといいますと、その左側に書きましたが、挙兵直後、真鶴岬から海を渡り、千葉氏と合流して房総半島を制圧した頼朝のところへ、千葉常胤に伴われた若者が進んできます。若者は毛利頼隆という名前なんですね。この頼隆という若者の父・義隆は、平治の乱で源義朝に従いまして戦死したんですね。当時頼隆は生後 50 日ほどだったんですけども、千葉常胤のいる下総国に配流されたというふうなことが書かれております。

何が言いたいかと申しますと、千葉常胤は源氏の御曹司を連れて来ているんです。源氏の御曹司と言うとピンと来ますね。まさに頼朝が源氏の御曹司、なんていうように言われますけれども、千葉常胤も源氏の御曹司を連れて来ているわけです。このことについてですね、こんなことを言っている人がいます。東北大学におられた入間田宣夫さんという方がおっしゃった、藤原秀衡の「奥州幕府構想」というのがあるんですが、これも説明しますと長いので、かいつまんで言います。実はこの時代、日本各地には源氏の御曹司というのが何人かいた。例えば頼朝がそうですね。それから今紹介した毛利頼隆もそうです。そして、平泉藤原氏のところには、源義経がかくまわれていました。あるいは、当時の貴族の高倉家には、源範頼がかくまわれていました。土佐国には、源希義が配流されていました。そのほか常陸国の志太義広という人もいます。それから源行家という人もいますね。日本各地には、源氏の御曹司がたくさんいます。それに合わせて、それぞれ各地に地域的な規模の大きい武士もいると。つまり規模の大きい武士のもとに、そういう源氏の御曹司がかくまわれて大事にされているという状況がある。そして治承・寿永の内乱というのが、まさにですね、源氏の御曹司を核とする大規模な武士団たちが、互いに勢力を争い合って、そして最終的に奥州合戦で決着をつけていきました。そして最後に勝ち残った頼朝が幕府を開きましたというよという、どう言ったらいいんでしょうね、これは高校野球のような、まさに入間田氏はトーナメントゲームなんていう言葉も使っているわけですけれども、この千葉常胤もですね、世が世ならば、この毛利頼隆を担いで、例えば北条氏が頼朝を担いだように、幕府を開いたかもしれない。そういう可能性のあったかもしれない、なんていうことを言うわけです。それを聞いて喜ぶ人はいるかもしれません。自分たちの地元に幕府ができる可能性があったのか、というふうに喜ぶかもしれませんが、すみません、これは真っ向から否定します。そんな可能性はないです。

というのは、これははっきり言っておきますけれども、各源氏の御曹司たちの条件がそれぞれ違いすぎるのです。それらの条件もまったく無視しているんです。私は冒頭で「武士というのは、貴族社会に含まれている存在です」と申しました。そして「それぞれ階級があります」という話をしました。これも結論的に申しますが、源頼朝は、各地に存在した源氏の御曹司のなかで、抜群に位が上です。位が上ということは、それに応じた人脈も広いのです。頼朝は伊豆国に配流される前、10 代前半の段階ですでに貴族社会の中枢で働いていたのです。内乱期に各地に存在した源氏の御曹司のなかで、そんな人はほかにいないんです。毛利頼隆に至っては、平治の乱で配流された段階で、生後 50 日だったわけです。そんな人物が貴族社会に位置づけられているわけがないですね。ということは、貴族社会に人脈なんてあろうはずがないんです。源義経も一緒です。希義も一緒です。木曽義仲なども同じです。頼朝だけが抜群に条件がよかったのです。なので、挙兵したあとの振る舞いも、当然違ってくるわけですね。千葉氏が毛利頼隆を推戴していて、源氏の御曹司を抱えていて、もしかしたら千葉にも幕府ができる可能性があったのかな、などと期待を持たせるような言い方をして、大変申し訳ないのですが、その可能性はなかったと言うべきでしょう。だからと言って別に悲しむ必要はありません、全国で幕府があったのは１カ所しかないので。悲しむ必要はまったくありません。

いずれにせよ、源氏の貴種というのは全国に散在しており、それを支える勢力もいたということです。ただ、そのなかで勝ち抜いていった頼朝の置かれていた状況、頼朝が持っていた条件を考えますと、やはり貴族社会における抜群の知名度、地位があった。これを決して無視することはできなかったんだということを、この千葉常胤や彼が連れて来た毛利頼隆との比較から指摘しておきたいと思います。

前半かなり時間が超過してしまったんですが、ひとまずこれで前半終了とさせていただきたいと思います。

【休憩】

３　鎌倉幕府政治史の展開と千葉氏・北条氏

（１）鎌倉幕府の成立時期

さて、３つ目に当たる「鎌倉幕府成立史の展開と千葉氏・北条氏」という、幕府ができてからの話に入りたいと思います。最初に「鎌倉幕府の成立時期」なんていう話を入れました。

「鎌倉幕府の成立はいつですか」と今でも聞かれることがあります。やはり皆さん興味があるのでしょうね、例えば、鎌倉幕府の成立は 1192 年、「イイクニつくろう鎌倉幕府」ですよと。あるいは文治元年、1185 年、「イイハコつくろう鎌倉幕府」ですよ、なんて言われたりするのですけれども、ことはそう単純ではありません。いきなりそんなことを言われても困るかもしれませんが、「鎌倉幕府の成立はいつですか」と聞くときに、「あなた

にとって鎌倉幕府とはなんですか」というように聞かないといけないんです、セットで。

というのは、鎌倉幕府はいろんな側面があるわけです。例えば武士の集まりです、という見方もできますし、それから国家守護を担っている組織であるという見方もできます。それからもっとあとの時代になってくると、京都の上皇ですとか、天皇の地位を左右していくようにもなっていきます。つまり、いろんな性格がどんどんつけ足されていくわけなんです。こういったときに、どこに注目するかによって、幕府の成立というものの画期というのが変わってくるわけです。

鎌倉幕府の成立はいつなのか、と言ったときに、よく聞く説として、以下の６つを挙げておきたいと思います。まず１つなんですけれども、「治承四年（1180）に幕府が成立しました」なんていうことをおっしゃる人もいます。東京大学におられました石井進先生がおっしゃっていたことなのですけども、これはすなわち、頼朝が鎌倉を中心に南関東を実効支配した段階であります。頼朝を中心としている武士団が結成されたとき、それをもって幕府の成立だというように、石井進氏は定義したわけです。だから、その定義において幕府の成立は治承４年ですよ、という話ですね。

あるいはその３年後、「寿永二年」という説もあります。実効支配が一応出来上がったのが、治承四年（1180）ですけども、その実効支配した地域について朝廷からその支配を公認された、つまりそれまでは単なる反政府勢力が違法に占拠していた状態だった段階なんですけれども、その違法な実効支配が朝廷から公認された段階が寿永二年（1183）だということですね。すなわち、頼朝が謀反人から脱却した段階だということで、幕府の成立の画期として評価する人がいます。

さらにはですね、文治元年（1185）、一般的に全国に守護、地頭が設置されたときだというようにおっしゃる人もいます。これがある時期までは主流だったんですけれども、私はむしろ評価すべきなのは、守護・地頭が設置されるよりも前ですけども、平家の滅亡がその年なんです。このことによって、頼朝率いる幕府軍は、唯一の官軍の地位を得るという、この点を重視すべきではないかなと思われます。

そして、私自身はこれを重視したいと思いますが、建久元年（1190）、頼朝の上洛です。頼朝は、この 30 年前に伊豆国に配流されたのですけれども、そのまま内乱を勝ち抜きまして、前の年に平泉藤原氏を滅ぼし、内乱が終息しました、ということでその翌年に上洛し、後白河院と面会する。そして今後、このあとの社会についていろいろ話し合ったそうであります。国家守護の権限、つまり朝廷を護持するという、幕府の最も基本的なアイデンティティーですけれど、それを獲得したのがこのときだとされていますので、私自身はこれが幕府の成立の画期だと思っています。

もちろん、これ１つだけでいいと思っているわけではありません。幕府とはだんだん出来上がっていくものなので、成立の画期をどこか１つに決めるわけにはいかないんですけど、あえて１つに決めろと言われるんだったら、私にとってはここです。

それから、先ほど申しました、「いいくにつくろう」は、その次の建久３年です。頼朝

が征夷大将軍に就任した年であります。ここにおられる方は皆さんすでにご存じかもしれませんが、15 年ほど前に発見された史料によって、頼朝はですね、ことさらに征夷大将軍というものを欲しがっていたわけじゃないということが判明しました。だから、頼朝が進んで望んだわけではない官職への就任にですね、幕府成立の画期を認めるわけにはいかないだろうと、近年ではそのように評価されております。もう今ではこの建久３年を幕府成立の画期だと言う人は、少なくとも専門家のなかにはおりません。

それから、最後にですね、あまりこれを言う人はいないんですけれど、承久３年（1221）があります。この年に起きた承久の乱ですけれども、これは何かといいますと、つまり３人の上皇を配流しまして、また新たに別の上皇と、それから天皇を擁立した。つまり、天皇の地位を左右するということに初めて幕府が介入したということで、そこに画期性を見いだすというのが、冒頭でお話ししました、野口実先生の先生に当たる、青山学院大学におられた貫達人先生が、このことを指摘されました。

結局「幕府の成立っていつですか」というように聞かれると困ってしまうんですけれども、現在では、幕府はだんだん出来上がっていくと考えられております。だから、どこか一つ線を引くのではなくて、少しずつ段階的に出来上がって変化していくというようなものとして、鎌倉幕府の成立を捉えるべきだろうというわけです。

（２）鎌倉殿の 13 人とは

続きましてですね、「鎌倉殿の 13 人」の話をしておきたいと思います。今年の大河ドラマのタイトルにもなっておりますが、これは実はドラマのなかで鎌倉殿の 13 人がいったい何を示すのかということは、今年の６月の時点ではまだ明らかにされていません。しかし、おそらくこれは建久十年四月に、頼家の政治を補佐する者として設置された御家人 13 人のことを指すんだろうということで、ここではその話をしたいと思います。

まずそれが登場する記事について紹介したいと思いますが、『吾妻鏡』建久十年四月十二日条を少し読んでみたいと思います。

> 十二日癸酉。諸訴論の事、羽林直に決断せしめ給ふの條、之を停止せしむべし。向後は大少の事に於て、北條殿、同じく四郎主（北条義時）、并びに兵庫頭広元朝臣、大夫属入道善信、掃部頭親能〈在京す〉、三浦介義澄、八田右衛門尉知家、和田左衛門尉義盛、比企右衛門尉能員、藤九郎入道蓮西（盛長）、足立左衛門尉遠元、梶原平三景時、民部大夫行政等談合を加へ、計ひ成敗せしむべし。其の外の輩は左右無く訴訟の事を執り申すべからざるの旨、之を定めらると云々。

このようになっております。この「羽林」というのは近衛の中将や少将の中国風の読み方で、この場合は源頼家のことを指します。つまりですね、さまざまな訴訟に関して、源頼家が直接左右することを停止し、今後については北条時政以下 13 人の御家人たちが審議して取り計らうようにということが決められたというわけです。この 13 人以外の人物が、

特に理由もなく幕府、頼家へ訴訟を取り次いではいけないということが書かれているわけであります。

さて、ここに名前の挙がった 13 人はどういう人たちなんでしょうか。先ほどにも少しお話がありましたように、この中には千葉氏の一族がいないわけでありますね。さて、この建久 10 年４月というのは、源頼朝が亡くなってだいたい３カ月後ぐらいであります。この 13 人ですけれども、従来はこの３カ月程前に頼朝が亡くなり、そして新たな鎌倉殿となった頼家、未熟な鎌倉殿であるわけですが、その権力を制限するものであるというふうに評価されてきました。

これはおそらく頼家の功績や人物像について、否定的な立場であります『吾妻鏡』の記述に引きずられた評価であろうということであります。例えばですね、ポイントとして注目していただきたいのが「其の外の輩は左右無く訴訟の事を執り申すべからざる」とある部分で、これは幕府に持ち込む訴訟について、名前が挙がった 13 人以外は頼家に取り次ぐことは禁ずるということであります。幕府に訴訟を持ち込むのに、この 13 人以外は取り次いではいけないというのは、すなわち幕府に持ち込まれる訴訟をある程度制限しようという意図が見えるだろうということであります。なぜそんなことをする必要があるのかですが、これは中世社会の特徴を少し考えておく必要があります。すなわち、中世社会においては、主従関係というのはですね、あくまでも個人対個人であります。御家人たちが仕えていたのは、鎌倉幕府ではないのです。幕府の御家人なんて言い方を私もしましたけども、細かく言うと、あれは頼朝の御家人なんです。ということは、頼朝が死んだら、その主従関係もいったんリセットされるんです。その後継者である頼家に仕えるかどうかは、お互いもう一回話し合いです。「あなたは仕える気がありますか」、あるいは「あなたは私を保護してくれる気がありますか」ということで主従関係を確認するのです。中世社会ってそうなっているのです。

ということはですよ、頼朝がこの３カ月前に亡くなりました。「自分の立場をもう一回保障してください」という要請が全国から来るんです、何百何千と。つまり、自分が引き続き幕府の御家人かどうかということを、もう一回あらためて確認してほしいといって、全国からそういう訴えが寄せられるわけです。するとどうなるか。これは、もちろんですけども、一個ずつ精査して、一個ずつ確認して、一個ずつ決裁しないといけないんです。しかし、これをですね、どこかでやり方を間違えてしまうと、幕府という機関、まさに幕府という組織の、あるいは新たな鎌倉殿となった頼家に対する信頼が、がた落ちになるんですよね。ということは、そういった個々の御家人の権利の保障等々に関する訴訟というのが、鎌倉殿が交代しましたから、一気にたくさん寄せられますけれども、それはある程度管理し、コントロールしなきゃいけないわけですよね。それを意味する言葉が、「其の外の輩は左右無く訴訟の事を執り申すべからざる」というように表現されているのであろうということであります。すなわちですね、訴訟の制限を図るという目的でこの 13 人が指名され、そして頼家を補佐して、審議や決裁に当たるという。そういう体制が整えられつ

つあったんじゃないでしょうか。

では、続きまして、この 13 人の顔ぶれを見ていきたいと思うんですけども、まずこれは結論的に申し上げたいと思うのですが、この 13 人たちは、出身が京都の貴族社会であろうと、それから東国の武士であろうと、まず共通しているのは、頼朝との個人的な関係が非常に深い人物たちだということです。順番に見ていきます。まずは北条時政。これは言うまでもないですね。頼朝の舅に当たるわけです。頼朝は、娘の夫に当たる人物ですね。そして北条義時であります。大河ドラマの主人公ですが、「頼朝の家子専一」というように称されております。つまり、最も信頼する家人というふうに称されております。もちろんそうなのですけど、言うまでもなく頼朝の義理の弟ですね。

そして、中原親能になりますけれども、この人も京都の貴族社会で育ったというか、経歴のある人物ですけれど、実は相模国で幼少期を過ごしたりですね、京都と東国のあいだをしょっちゅう行ったり来たりしていた。そのなかで、頼朝とも知り合いになったという、そういうちょっと変わった経歴の持ち主なんですが、いずれにせよ、頼朝と昔からの知り合いだったんですよ、というわけです。

また、その次の大江広元ですけれども、大江広元は中原親能と義理の兄弟であります。２人とも中原広季の養子になっております。つけ加えて言うならば、大江広元は後白河院の北面に名前を連ねております。

それからですね、三善康信、藤九郎盛長、そして足立遠元、比企能員という人物が挙げられますけれども、彼らはいずれも頼朝の信頼する乳母である比企尼の縁者であります。

そしてですね、八田知家、これは下野国の武士です。宇都宮の一族なんですが、これもですね、頼朝の乳母である寒川尼の縁者であります。頼朝にはほかに、例えば山内尼ですとか、あるいは寒川尼とかですね、複数の乳母がおり、そしてその縁者である武士たちが、有力な御家人として頼朝を支えていくことになるのですけれど、ドラマの構成上、あまり乳母をたくさん描くとややこしいと言われたんでしょうか、NHK の大河ドラマではあまり描かれていないな、というのはちょっと気になるところではあります。

それからですね、民部大夫行政、二階堂行政という人物ですけれど、彼は頼朝の母方である熱田大宮司家の縁者であります。

そして東国の武士といえば三浦義澄と和田義盛ですけれども、彼らはですね、頼朝の挙兵当初から従いまして、そしてさらにつけ加えますと、三浦義澄は幕府の御厩別当、これは幕府の馬を管理する人であります。そして和田義盛は、侍所別当でございます。

それから梶原景時ですけども、侍所所司を務めます。侍所のまさに実務を担当する人物であります。和田義盛とともに、御家人統制を行う人物であります。

このようにですね、ざっと簡単に彼らの経歴を紹介しましたところ、頼朝と個人的な関係が深いということがおわかりいただけるかと思います。では、そんなことを言えば、「千葉常胤だって、頼朝との個人的な関係は深いんじゃないのか」というように言われるかもしれませんが、千葉一族は加わらなかった。これはどうしてでしょうね、ということ

です。千葉市にお住まいの皆さんにとっては「どうして千葉の一族が 13 人のなかに入っていないんですか」と気になるかもしれないんですけれども、その心配には及びません。というか、その心配は皆さんだけのものではありません。というのは、日本全国のほとんどの御家人は、13 人に加わっていません。ほかの大多数の御家人たちは、このメンバーに加わっていないわけであります。ということは、「どうしてこの 13 人のメンバーに入らなかったんですか」ということを考えるよりも、「なぜこの人たちが選ばれたのか」ということを考えたほうが、たぶん手っ取り早いはずです。それを考えてみたいと思います。

理由は２つあります。１つ目はすでに申しましたが、出身が京都の中下級貴族であろうとも、それから東国武士であろうとも、頼朝との個人的な縁故関係の深い者たちが選ばれているわけであります。この点に関しては、おそらく千葉常胤、千葉氏一族も該当なしとはしないと思われるんですけども、次の条件が当てはまりません。それはですね、鎌倉幕府の御家人のなかで数少ない諸大夫身分、これですね、今日の冒頭にお話ししましたように、四位や五位程度の位、位階を持つ人々のことを諸大夫と言うんですけども、幕府の御家人のなかにもごくわずかに諸大夫身分を認められた人たちがおります。ここに名を連ねた 13 人たちは、既に諸大夫身分に達しているか、あるいは将来その諸大夫身分に達することが十分期待できるような格の高い者たちが選ばれているということであります。千葉氏も含むほかの御家人たちは、この二つ目の条件にやはり合致しないと言わざるを得ないわけであります。

そしてですね、つけ加えますと、先ほどご覧いただいた、建久十年四月十二日の条を見ますと、この 13 人を誰が指名したのかということは書かれていないのですけれども、この当時、頼朝死後の源氏将軍家の家長代行として存在しておりました、北条政子がおそらくこれは指名したんだろうというように考えられます。

こういった経緯で指名されましたのが、いわゆる 13 人の合議ですね。合議をおこなうと定められた 13 人の御家人たちというのはですね、幕府御家人のなかでもごく少数の、そして特別な地位にある者たちであると評価できるわけであります。例えば細川重男氏などは、特権的支配層といった表現を用いるわけですが、まさに幕府の御家人のなかで、そういったごく一部の特別な地位にある人たちだということであります。

（３）幕府の内部抗争と千葉氏・北条氏

さて、続きまして幕府の政治が展開していくなかで、さまざまな内部紛争が起こるということは皆さまもよくご存じだと思います。そういったなかで、その一つであります和田合戦を取りあげたいと思います。

和田合戦というのは、ご存じの方がいらっしゃいますでしょうか、建暦三年（1213）、亡き源頼家の息子であります、千寿という人物をですね、この当時将軍でありました実朝に代わる将軍、新たな鎌倉殿として擁立しようという、そういう動きが発覚いたしました。これに和田義盛の一族が関与していたということで、関与を疑われた和田義盛が、いろんな経緯はあるんですけれども、挙兵いたしまして、実朝の身柄確保と、それから北条義時、

大江広元の殺害を謀ったわけなんですけれども、果たせるかな、義盛とその一族は滅亡するに至った、そして北条義時や大江広元による幕府の支配が確定したようだという、そういった戦いでございます。

ここで、皆さんに注目していただきたいのが、史料の『吾妻鏡』建暦三年五月三日の条を見ていただきたいと思うのですが。実はですね、和田合戦の戦いというのは、この前の日、５月２日から始まっております。この５月３日というのは、実は合戦の２日目に当たります。だから、足かけで言うと３日にわたっての戦いだったと思います。

それともう一つ、和田合戦というのは、頼朝が挙兵して頼朝が鎌倉に拠点を定めてから最初の、鎌倉が戦場となった市街戦が展開されるんですが、そういった意味でも幕府内部で非常にインパクトが大きかった事件であったわけです。『吾妻鏡』の五月三日の条に傍線を引いた箇所に、こんなことが書いてあります。「安芸国住人山太宗高を以て、御使を遣はさるの間、軍兵之を拝見せしめ、悉く以て御方に参ず。又、千葉介成胤党類を引率し馳せ参ず、」と書いています。「千葉介成胤党類を引率し馳せ参ず」というように書いていますね。千葉成胤の名前が出てきます。これは鎌倉幕府の歴史書であります『吾妻鏡』の記載ですけれども、一方でこの様子を示しました、京都の貴族、藤原定家の日記『明月記』にもですね、やはり似たような記述があります。８ページのほうに傍線を引いた箇所がありますので、ご覧いただきたいと思います。義盛の甥、三浦左衛門義村というところですけれども、「義盛甥三浦左衛門義村、（もとより叔父と違背し、仇敵たり、）義盛すでに出軍するの由を告ぐ、両人の告げにより、母儀、妻室ら、わずかに逃れ出す」とありまして、さらに次の傍線箇所ですね、また千葉が出てきます。「千葉の党類、常胤の孫子、精兵を練り、隣国より越し来たる、」というように書いてありますね。つまり、傍線のあとのほうですが、千葉の一族が、名前は書いていないのですけれど、常胤の孫が、精鋭部隊を率いて隣の国から援軍として駆けつけましたよ、というように書いてあるわけです。つまりですね、おわかりいただけますでしょうか。千葉介、名前は書いていないんですけれど、「常胤の孫子」というのが、これは千葉成胤のことを指しておるのでありましょう。もっとはっきり言いますと、『吾妻鏡』の五月三日の条にはですね、ほかならぬ「千葉介成胤党類を引率し馳せ参ず」というふうに書いています。千葉成胤の活躍がここではっきり書かれているということですね。

またですね、もう一点、先ほど一緒に見ていただきました、『明月記』の五月九日の条を見ていただきますと、義盛の甥（※実際は従兄弟。以下同。）に当たる三浦義村が、もともとこの人はおじに当たる義盛とライバル関係、「仇敵」と書いていますので、宿敵と言うんでしょうか、敵対関係にあったというわけです。「義盛が兵を出したよ」ということを告げたことによって「母儀」、これはほかならぬ北条政子のことなんですけども、それから「妻室」、これは実朝の奥さんに当たる人物が、「わずかに逃れ出す」というように書いています。

少しわかりにくいかもしれませんが、実は和田合戦においては、和田義盛の攻撃目標は

３つあったんですね。１つは北条義時邸です。おそらく殺害を狙ったんでしょう。それからもう１つが大江広元邸です。これも大江広元の殺害を狙ったのでしょう。３つ目が、実は将軍御所です。将軍御所に攻撃をかけたのは、別に「将軍御所を落としてやろう」、あるいは「実朝を殺害してやろう」というわけじゃなくて、これはクーデターなので、幕府における正当性の根源である、まずは将軍の身柄の確保を図ったたわけです。実朝の身柄を確保したうえで、自分たちが幕府の正規軍だぞ、ということにしたうえで、義時、広元を倒せという作戦だったはずなんです。

にもかかわらずですよ、当初は和田義盛に味方していた親族の三浦義村が、同じ一族同士であるにもかかわらず、互いに仲が悪かったというわけです。仲が悪かったんですけれど、当初は三浦義村は和田義盛の味方をするよと言っていたんですよね。ですけれども、いざ合戦が始まるという段階で、和田義盛を裏切りまして、それを源実朝に通報し、早くお逃げなさいといって、実朝、それから政子、そして実朝の奥さんの身柄を逃がしたというわけですね。これによって、和田義盛の作戦は失敗するわけです。つまり、真っ先に実朝の身柄を拘束したい、確保したいという作戦が失敗したのです。これにより義盛は、いわば幕府に対する反逆者、謀反人として、結局合戦に敗れるということになったわけです。

それが、そういったことについて、その次に書いてあります【参考】の『愚管抄』には「義盛左衛門ト云フ三浦ノ長者。義時ヲ深クソネミテウタンノ志アリケリ」というようにあります。つまり和田義盛が北条義時を討とうとしたんですよ、それを実行に移したなんていう話が書いてあるわけですけど、注目していただきたいのが、「義盛左衛門ト云フ三浦ノ長者」というように書いています。名字が違うのでわかりにくいかもしれませんが、彼らはいずれも同じ三浦氏の一族です。そのなかで和田義盛というのは、三浦の一門の長者、すなわち彼こそが三浦一族の中心だというように見られていたというわけです。それに対してですね、義村がいわば寝返ったというふうなかたちになります。

話があっち行ったり、こっち行ったりしてしまったんですが、和田合戦における千葉氏の動向なんですけども。合戦の勃発は、先ほどご紹介したとおり、５月２日であります。その後ですね、千葉成胤、それから常胤の孫子なんていうかたちで出てきましたけども、成胤率いる千葉氏の軍勢は、３日にはすでに到着しているわけです。２日に合戦が始まって、なんで３日に到着できるんだというのがちょっと不思議なんですけども、これはおそらく知っていたんでしょうね。そして義時、広元方へ加勢します。そしてその結果、和田義盛は敗北いたします。繰り返しになりますが、千葉成胤の活躍が特記されます。千葉氏に詳しい皆さんは、私なんかよりもよくご存じだと思うんですけども、この時代、千葉氏の一族においては、この千葉成胤、それからその息子の胤綱という流れよりも、成胤の弟に当たります常秀ですね、この境常秀とその息子秀胤の流れのほうが、主流であったと言われております。幕府のなかでの地位が彼らのほうが高かったんだろうと言われているんですけども、にもかかわらず『吾妻鏡』においても、それから『明月記』においても、和田合戦の記述において、境常秀の働きが特記されていないというわけです。「なんで？」

と思うわけですけども、まさに書かれていないということが大事でありまして、活躍が特に記されている千葉成胤こそが、やはり和田合戦において積極的に戦いたい理由があったんです。なぜか。自分は千葉一族のなかでは、どちらかというと劣勢だから、この戦いでぜひ活躍して、北条氏、あるいは三浦氏に恩を売りたい。そのことによって、幕府での地位を安定させたいという明確な動機があったということになります。

そういった意識の裏返しとして有名なのが、『古今著聞集』の記述であります。これも皆さんよくご存じの話だと思うんですけれども「千葉介胤綱三浦介義村を罵り返す事」というところです。すごく面白いのですが、すべて読んでいると時間がないかもしれません。次のような話です。

> お正月に、有力御家人が列席しています。晴れの舞台です。御家人たちが席に着きます。現代社会における会議と同じで、上座、下座なんていうのがあります。当然上座には偉い人が座ります。順番に下座のほうに向けて偉くない人が座っていくわけですけれども、このときにですね、千葉介胤綱という人物がやってきてですね、すでにどこかに座っている三浦義村よりもさらに上座のほうに、どかっと座ったわけです。それを見た三浦義村が、気に入らんな、というようなことで、こんなことを言ったわけです。「下総の犬は臥所を知らんぞ」と。下総の犬は自分の寝床を知らないのか、みたいな悪口を言ったのです、はっきりと。そしたらですね、胤綱がなんて答えたかというと「三浦の犬は友を食らうなり」と言ったわけですね。三浦の犬は、友達を食べるんだよね、みたいに言い返したというわけです。よくぞ言い返したなということで、この話が有名になりました。

こういった話なのですが、細川重男氏によれば、この当時の千葉胤綱は満年齢で 11 歳。だから小学５年生ぐらいの子が、40 すぎぐらいのおじさんに向かって「三浦の犬は友を食らうなり」と言ったことになるのだそうです。

これはおそらく、やはり和田合戦の経緯というのが当然踏まえられているんだろうというわけです。すなわちそれは、三浦義村は自らの裏切りによって、北条氏を助けました。そして和田義盛を滅ぼすことに成功しました。それによって三浦義村は、三浦一門における主流の立場を確保することができたわけです。北条氏に協力することによって。そしてまた、それにより北条氏から信頼されることになったのですよね。幕府内部での影響力も飛躍的に高まったわけです。三浦義村にとっての和田合戦というのは、そういう戦いだったわけです。一族内部の対立を、これによって克服したということなんですよね。そしてそれは、北条氏にとっても大変ポジティブに働いたことによって、北条氏からもまた重視されるようになったわけなんです。だから三浦義村もこんなでかい顔をしているわけです、侍所で。ところが、あとからやってきた、千葉氏の若き当主である胤綱は、これは挑発でしょうね。自分は三浦よりも偉いんだぞ、みたいなことで上座に座ろうとする。示威行為

ですよね。それはおそらく先ほど見ていただいた言葉でわかるように、胤綱の父である成胤が、いち早く軍勢を率いて三浦氏及び北条氏を救援し、そしてそれによって三浦氏が、そして北条氏は勝利したという意識があるんでしょうね。俺たちのおかげで勝ったでしょと。おまえらがでかい顔をするのは俺たちのおかげということをわかっているんでしょうねということをたぶん言いたかったんだろうということが、この和田合戦をめぐる人々を見ていくとわかるというわけであります。

このようにですね、和田合戦における動きを簡単にまとめておきたいと思うのですけれども、和田合戦においては、三浦義村が大きな役割を果たしました。その三浦義村という補助線を引くことによって、北条氏や、それから千葉氏の動向がより見やすくなるんじゃないかなというふうに思うわけです。

まず三浦氏ですけれども、これは和田合戦という戦い自体が、和田義盛と三浦義村という、三浦一族内部の実は争いだったということです。これに勝利したのは三浦義村でした。三浦氏においては一族内での争いだったのですけれど、では北条氏においてはどうだったんですか、ということですが、これは実はポイントです。北条義時、それから義時の息子である泰時、朝時もこのときに活躍しているのですけれども、さらに弟の時房、そして義時の姉に当たる政子というのは、実は一枚岩だったんです。ここで分裂が起きていないんです。だいたい幕府の御家人内部というのは、この場合ですと彼らの父である北条時政が亡くなったあと、だいたい兄弟同士というのは分裂していくわけです。だから千葉氏の一族なども、成胤の流れと、それから常秀の流れとに分かれていったりするわけですけれども、北条氏においては、和田合戦においても分裂していないんですよ。一枚岩だったんです。わりと当然なこととして、なんとなく理解してしまうのですけれど、これはかなり珍しいです。というわけで、北条氏は一丸となって戦い、そして勝利することができました。そして、誰一人欠けることなく、つまりそのまま勢力を維持し、その幕府における基盤をさらに盤石なものにしました。

そして千葉氏です。千葉氏は当時、一族内で主流の地位を固めつつあった常秀流に対抗するように、成胤とその息子たちが活躍したわけであります。『吾妻鏡』や『明月記』には、常秀やその一族の活躍が特記されていないんですけども、その特記されていないということがまさに重要であり、千葉氏にとっては、この成胤らがここで活躍するんだ、ということで勝負をかけたというように評価することができるだろうということであります。

そして、先ほど申しあげましたけど、三浦氏というのは三浦一門内部での対立であります。これも勝利いたしました義村が、三浦一族のまさに嫡流の地位を確定させまして、その後長らく幕府のなかで有力な地位を確保していくことになるわけであります。

さて、このように、この和田合戦が、幕府の御家人の一族内部の対立という、非常に特徴的な動きが反映された戦いであったということを、わずかな史料を提示したのみでありますが、ご覧いただけたかと思います。

この一族内部の対立というのが、では鎌倉幕府だけで特徴的なものだったのかというこ

となんですけれども、実はそんなことはないというのが、私の考えでございます。といいますのは、これは院政期社会においては、家が、あるいは一門がいくつもの流派に枝分かれしていきまして、そのなかで対立が起こるというのは、実はそんなに珍しいことではないわけです。というか、むしろ鎌倉幕府の内部でそういった争い事が起きるよりももっと先に、院政期における貴族社会において、そうした争いが実はもうすでにあったのです。

幕府ができるよりももっと前に存在しておりました白河院であったり、鳥羽院であったり、あるいは後白河院もそうです。それぞれの貴族の家のなかの内部対立というものを、巧みに利用して、自分の息のかかった人物を当主にするというかたちで、貴族社会を統制していきます。そうやって自らが院政をおこなう基盤を固めていくわけなのですが、こうしたやり方というのは、皆さんがよくご存じの人もやっていますね。幕府ができたあとに。そう、頼朝です。頼朝も、幕府の御家人たちのいろんな一族内部の対立を利用して、例えば本来は嫡流の地位にあったと見られる、あるいは主流の地位にあった人物をわざと排斥して、以前は傍流と見られていた人物を登用して、その人物を自分のいわば子飼いにして、自分の支配圏の基盤としていくというようなことをしています。そうやって内部対立を煽って、自分の子飼いの人物を集めていくなんていうのが言われているのですけれども、実は、それはぜんぜん頼朝のオリジナルじゃないです。それよりももっと 50 年、100 年前に、すでにそうした手法は用いられているわけです、院政期社会において。

ただ、これが激しい武力対立、和田合戦なんかに代表されるような武力衝突に至るのは、確かに鎌倉幕府の特徴ではあるんですけれども、一族内部で対立が発生する、そして上位権力がそれを利用して、巧みに自らの支配を固めるというのが、実は院政期社会の特徴、つまり院政期における貴族社会全体の特徴であるんだという点を、ここで指摘しておきたいと思います。

おわりに

最後に簡単にまとめておきます。まず武士は貴族社会に組み込まれた存在だということです。特に、院政期における貴族社会の特徴に武士たちの動向も左右されるんだということで、いくつか例を挙げながら、今日はご紹介をいたしました。そして保元・平治の乱の時代から、北条氏や千葉氏のことについてお話しをいたしました。そして、頼朝挙兵という話を切り口に、各地に源氏の御曹司という者がいたんですけれども、そのなかで頼朝が勝ち残るというのは、本当に偶然だったのかどうかということについてお話ししました。これは決して偶然ではなく、やはり頼朝がずばぬけたステータスを持っていた、だから成功したんだろうというようなことをご紹介いたしました。そして鎌倉殿の 13 人ですね。どうして千葉氏はこれに組み込まれなかったんだろうかということですが、話はむしろ逆で、組み込まれた御家人のほうがむしろ珍しかった。そして組み込まれた原因を考えますと、これは頼朝との個人的な関係が深い人物たち、そして身分が高い御家人たちが選ばれたのだろうというお話をいたしました。そして鎌倉幕府内部というのは、御家人たちの同族内

部でですね、対立が非常に激しいものだったんですけれども、そういったものは、実は院政期貴族社会の特徴をそのまま受け継いでいるということができるわけであります。そのなかで幕府の特徴を一つ挙げるならば、それが大規模な武力衝突にも発展しているということです。

最後に、私も先ほどご紹介いただきましたように、北条義時についての本を書かせていただく機会がありました。そういったなかで、例えば「北条義時というのは優秀な人物だったんですか」なんて質問を受けることがあります。そういう質問に皆さんは興味があるんだろうな、というのはよくわかるんですけども、優秀な人物かどうかって、皆さんはどうやって判断されるんでしょう。皆さんは優秀な人ですか。優秀かどうかの基準ってなんでしょうかということであります。これは、笑いながら申しましたが、冗談ではなく、人が優秀かどうかという基準はなかなか難しい。そしてその基準があるわけではないというわけです。そしてまた、北条義時のことを記した史料というのは、示しました『吾妻鏡』のように、かなり編集に際して脚色が施された史料が多いわけであります。そういったものを根拠に、人として優秀かどうかということを測ることはできないということがありますし、また北条義時が最終的に成し遂げたとされる事績に関しても、実は北条義時という人物が生まれ育った環境が、ほかの武士と比べても大変有利であるということによります。だってそうですよね、「源頼朝の家子専一」というのは、これは義時が頑張ったから「頼朝の家子専一」になったんでしょうか。違いますね。個人の努力ではないですね。それは彼が生まれ育った、偶然によるものといえる部分が大きいだろうというわけであります。ですから頼朝の側近として義時が成し遂げたこと、そこから北条義時が優秀かどうかということを測ること自体が、残念ながらナンセンスと言わざるを得ないと私自身は考えております。つまり結果から、その人が優秀だったかどうであったかということは、なかなか知り得ないというわけであります。こういった機会では、そういうご質問を受けることが多いわけなんですけれども、この機会にこういうことについても、自らの意見を表明しておこうと思った次第であります。

時間が大幅に超過いたしまして、大変申し訳ございません。ご清聴いただきまして、誠にありがとうございます。以上で終了させていただきます。

司会：それでは以上で、岩田先生の講演は終了させていただきます。先生、ありがとうございました。では、ただ今から休憩とさせていただきます。そのあとで、先生へのご質問にご回答いただきます。先生にご質問がある方は、休憩のあいだに、お手元に配布した質問用紙にご記入のうえ、受付までお持ちください。

【休憩】

質疑応答

司会：それではお時間となりましたので、再開いたします。これより、会場の皆さんよりいただきましたご質問を、岩田先生にご回答いただきます。なお、多数のご質問をいただきましたが、お時間の関係ですべてのご質問にお答えできないことを、あらかじめおわび申し上げます。では、最初の質問です。

質問：「御家人の関係性は個対個」ということでしたが、平家の場合は、「累代の家人」という関係性（『平家物語』）が重視されていたと思います。鎌倉の御家人が、平家当時のような軍事貴族のあり方から変化したのでしょうか。

岩田：再び岩田でございます。ご質問、ありがとうございます。御家人の関係が「個対個」、つまり、あくまで幕府に仕えるのではなくて、頼朝に仕える、頼家に仕える、実朝に仕えるんですよ、ということで、平家の場合は「累代の家人」という関係性が重視されていたと思いますということですけれども、鎌倉の御家人が平家当時のような軍事貴族のあり方から変化したんでしょうかということですが、鎌倉幕府の御家人がいわゆる院政期における軍事貴族のあり方から変化したというのはおっしゃるとおりでございます。鋭いご指摘かと存じます。それとですね、御家人の関係性が「個対個」、それに対して平家の場合は「累代の家人」という。平家は「重代相伝の家人」なんて言ったりしますけども、それはそのとおりでございます。ただですね、この点は頼朝にとって大変不利であるのが、頼朝は伊豆国で挙兵し、そして多数の武士たちを御家人として組織する。そして幕府という組織をつくるんですけれども、頼朝が特殊なのはですね、まずは流人だということですね。謀反人なんです。いわば身ぐるみ剥がされて伊豆国へ流されているというわけです。つまり、それこそ父祖伝来の所領であるとか、それから所領を管理するところの家人であるとかというのを、全部奪われた状態で伊豆国へ流されているということです。まずそれが違うわけです。だからつまりそこで、河内源氏の累代相伝の家人との関係もいったんそこで切れるわけですね。先ほども例に出したと思うんですけども、相模国の山内首藤ですとか、波多野とかという一族で、実は河内源氏の重代相伝の家人ですけれども、彼らとの関係も断たれるわけです。だから、実は頼朝の出身であります河内源氏も、平家と同様、重代相伝の家人というのは、あるいはそれに似た仕組みはあったのですが、まずはその仕組みが断たれたということですね。そして頼朝は、流人の立場から、重代相伝ではない、つまり一人ずつ、いわばスカウトした武士たちを御家人として組織せざるを得なかったということですね。結果的には、それが幕府成立につながっていったわけですけれども、例えば伊勢平氏などと比べても明らかに不利な点であったはずであります。

それから平家では重代相伝の家人というのが重視される。例えば、平田家継や平貞能とかが有名ですけれども、実はですね、平家のほうも重代相伝というふうに言っているんですが、これは代替わりごとに繰り返し、繰り返し主従関係が形成されているということで、一個ずつ取りあげていきますと、やっぱり個々の人間に従属しているのではないかという

ように言われるわけです。一例を挙げますと、例えば平家家人というように一括りに言われがちなんですが、実はですね、平家も、例えば清盛と、それからその後継者である宗盛が平家の主流に当たるわけですけれども、例えば傍流に当たる一族には、これは宗盛の兄に当たる人物ですが、重盛、それと重盛が亡くなったあとの重盛の家は小松家、小松殿と言ったりしますけれども、それから清盛の弟に頼盛がいる、池大納言家というのがいたりします。実は家人たちも、小松家の家人、池殿の家人、それから清盛の家人というかたちで、実は個々、ばらばらなわけなんですよね。その家人同士の連携というのが、実はあんまり緊密ではなく、自分は小松家の家人だからあんまり近づきたくないなとか、あるいはもっとあけすけに言いますと、池大納言家と、それからその家人たちは、木曽義仲が寿永２年に平家を都落ちさせたときに、都落ちに従っていないですね。よく平家一門、あるいは平家は一蓮托生なんて言ったり、言われたりするんですけども、ぜんぜんそんなことはなくて、個々ばらばらです。ということは当然家人たちも個々ばらばらだということであります。ですので、属人的な主従関係というものが、実は平家一門のなかにも共通して見られる傾向であったのではないかというふうに、私自身は考えておるところでございます。１つ目の質問に対しては以上でございますが。よろしいでしょうか。

司会：ありがとうございました。それでは２つ目の質問になります。

質問：源頼義以来、源氏に由縁のある鎌倉に近い伊豆に、なぜ源頼朝を配流したのでしょうか。

岩田：ありがとうございます。源氏に由縁のある鎌倉に近い伊豆に頼朝を配流した理由ということですけども、質問していただいた方の揚げ足を取るようで申し訳ないんですけれど、鎌倉に伊豆が近いかどうかというのは、これは相対的な話になります。相対的とは、つまり主観的な問題なので、鎌倉と伊豆が近いと思う人は近いでしょうし、遠いと思う人は遠いでしょうし、というところなので、その辺りはお答えしづらいんですけれども。

これは、まずそもそも頼朝が配流された伊豆国ですけど、まず伊豆国は流刑地、配流地なんですよね。だから定番の、配流されるとしたらここですよ、みたいな場所です。ほかにも佐渡とか、隠岐とか、土佐とかいろいろありますけども、伊豆国というのは、定番の配流先ですよね。そこが選ばれたということで、別にそこが頼朝の父親の義朝と縁があったかどうかみたいなことは、それは流す側はあんまり考えないだろうなというところであります。また、流す側がですね、伊豆国が相模国の鎌倉に近いかどうかということを考えたかは、この場合は確かめようがありません。そういうところでございます。

それと、仮にですけれども、配流された先が、例えば頼朝とすごく縁のある場所であったとして、われわれは源頼朝という人物が、伊豆国に永暦元年、1160 年に流され、北条氏と出会って、その 20 年後の治承４年、1180 年に挙兵したという事実を知っています。ですけれども、永暦元年の段階で、それを想像できた人はおそらくいなかったと思うのです。そうであるならば、別に縁があろうがなかろうが、どこに流しても、しかも身ぐるみ剥いで流罪にしているわけなので、しかもそこに監視もつけるわけです。当初は頼朝を伊豆国

で監視していたのは、伊豆国の伊東氏というふうに言われていますけども、監視役もつけるわけなので、別に縁があろうがなかろうが、身ぐるみ剥いで流すのであれば、それはあまり関係ないんじゃないのかなというところでございます。結果的にわれわれは、頼朝が伊豆国で挙兵し、そして先祖代々縁のある鎌倉に入ったということを知っているので、その結果から遡及して、あのときこうしていればね、なんていうふうに考えがちなんですけれども、同時代の人がですね、それを想像するのはおそらく不可能ですので、それはあまり言っても仕方がないのかなというところであります。

それともう一点、今日の話に即して言うならば、頼朝が、例えば、たまたまかどうか、伊豆国に配流されたわけですけども、これが例えばほかの国に配流されていたとしたとしてもですね、たぶん頼朝を助けてくれた人、あるいは頼朝の縁者は、たぶん近所にいたんだろうなと思います。というのは、伊豆国だって本来頼朝は縁もゆかりもないはずですけれど、先ほども紹介しましたように、伊豆国の在庁官人は北条氏でした。北条氏というのは、北条時政が若いころに、頼朝の若いころの上司だった吉田経房と知り合いだったりするんですよね。さらに、源三位頼政という、頼朝のお父さんと一緒に戦った人が、伊豆国の知行国主だったりするわけです。ということは、伊豆国に流された頼朝も、まったく右も左もわからないところに流されたというわけではないということなのですね。さらに言うならば、配流されているあいだ、20 年間も自らの私財をなげうって、頼朝の生活を支えてくれた比企尼とその一族という人たちがいたわけです。比企尼はおそらく頼朝がもっと違うところに配流されていたとしても、私財をなげうって、おそらく生活を支えてくれたでしょう、乳母として。ということは、どこに流されたということは、あんまり関係ないんじゃないのかなというふうになってくるわけですよね。さらに言うならば、どこに流されたとしても、そういう一定程度の生活の保証は、あるいは縁者を確保してくれるような環境が、配流される以前の頼朝の貴族社会における活動で、その基盤ができていたということなんですよね。もう一回言います。配流される以前の段階で、頼朝は配流先で有利に過ごせるような環境をすでにつくっていたということなんです。それはおそらく頼朝自身の努力ではなくて、彼が河内源氏の義朝の嫡男に生まれたという、その関係がやはり大きいんだろうと思います。だから質問に対する答えとしては、伊豆国に配流された頼朝は、それまで築いた人脈等々を活用して挙兵し、そして挙兵に成功することになるわけですけども、おそらくそのように言うならば、伊豆国じゃなくたって、頼朝はかなりのチャンスがあったんじゃないのかなというふうに考えられます。ほかの例えば源氏の御曹司たちに比べて、かなり有利だったんじゃないのかと。それはご先祖様の縁もある鎌倉に近いとか、遠いとかということは、あまり関係なかったのではないのかなと考えられるという次第でございます。長々と失礼いたしましたが、以上でございます。

司会：ありがとうございました。多数の質問をいただきましたが、お時間の都合もございますので、ここでご質問を終了させていただきます。すべてのご質問にお答えできないこ

とをお詫び申し上げます。
　以上で岩田先生の御講演を終了させていただきます。岩田先生、ありがとうございました。

岩田：聞き苦しいところ多々あったかと思いますが、最後までご清聴いただきまして、誠にありがとうございます。今日、この機会を与えていただきました千葉市の皆さん、それから今日ご来場の皆さんには、あらためて深く御礼申しあげます。ありがとうございます。（拍手）